

のロストル施設が約一トメほど確認されている。長さ約六・五トメ、幅一・三トメを測り、小田分類の法隆寺系Ⅰ式が四点出土している。

#### 四 各寺院出土瓦と生産遺跡

##### 古瓦研究諸説

九州の東玄関口である豊前地方は、九州の中でもいち早く多くの寺院が建立され、朝鮮半島と畿内地方の文化が導入されたところである。前節で記したように、各寺院から発見される古瓦文様及び技術面に、それらの文化導入の残滓を見い出すことが可能である。古瓦は、以下「朝鮮系瓦」、「畿内系瓦」、「大宰府系瓦」に大別でき、更に細分化される。

##### ① 朝鮮系瓦……百済系・新羅系・高句麗系

##### ② 畿内系瓦……法隆寺系・川原寺系・平城宮系

##### ③ 大宰府系瓦……老司式、鴻臚館式

##### ① 朝鮮系瓦について

朝鮮系瓦については小田富士雄によって論究されており、近年では真野和夫、亀田修一らの私見が述べられている。

##### 1 百済系瓦

百済系古瓦は京都地域で四寺院、山国川流域で二寺院、宇佐地域で二寺院から発見されている。豊前地方発見の軒丸瓦の特徴は、中房に一十六の蓮子を配し、蓮弁は単弁八弁で弁の先

豊前地方出土の各系統古瓦

| 寺跡名<br>各系瓦名 |     |     |       |       |      |      |      |      |       |      |      |
|-------------|-----|-----|-------|-------|------|------|------|------|-------|------|------|
| 虚空蔵寺        | 法鏡寺 | 弥勒寺 | 小倉池廃寺 | 塔の熊廃寺 | 相原廃寺 | 垂水廃寺 | 木山廃寺 | 上坂廃寺 | 豊前国分寺 | 椿市廃寺 | 菩提廃寺 |
|             | ○   | ○   |       |       | ○    | ○    | ○    | ○    | ○     | ○    | ○    |
|             |     |     |       | ○     |      | ○    |      |      |       |      | ○    |
| ○           |     |     |       |       |      | ○    |      |      | ○     | ○    | ○    |
|             |     |     |       |       |      |      |      |      | ○     | ○    | ○    |
| ○           | ○   | ○   | ○     |       |      |      |      |      | ○     |      | ○    |
| ○           | ○   |     |       |       |      |      |      |      |       |      |      |
|             |     |     |       |       |      |      | ○    | ○    | ○     | ○    |      |
|             |     |     |       |       |      | ▲    | ○    | ○    | ○     |      | ○    |
|             | ○   | ○   |       |       |      |      |      |      | ○     |      |      |

端が反転し、その両側が凹んでいる。また、間弁は短く、外縁は一重圈が巡っている。このような特徴ある軒丸瓦は「九州式単弁瓦」と呼称され、畿内で発見される初期寺院の単弁瓦とは趣を異にしている。

小田は蓮弁の形態を三種類（A・B・C）に分類し、Aから順次

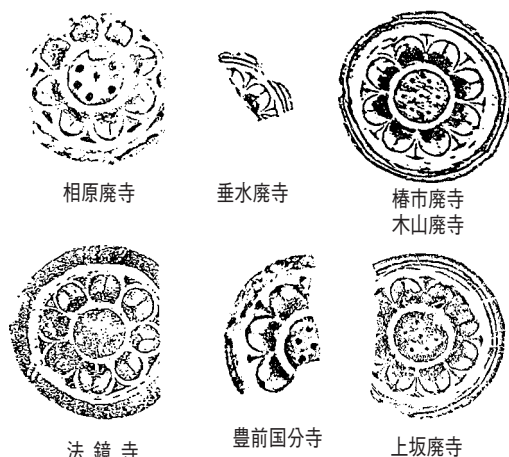


図3—12 豊前地方出土の百済系軒丸瓦

智天皇四年（六六五）とする歴史上の事実には、基肄城出土の単弁軒丸瓦が、豊前地方の各寺院から出土する軒丸瓦と類似することを指摘し、更に、その瓦の祖形を百済武王時代の益山、王宮の帝釈寺に使用された瓦に求め、泗泚時代後期の様式であることなどから、九州に導入された年代を七世紀後半ごろと推定している。

以上のことから、豊前地方出土の百済系単弁瓦が、いつの段階で導入されたか、詳細については明らかでないが、正倉院文書の『豊前国大宝二年戸籍断簡』に見える、秦部・勝等の渡来

蓮弁の旧・新の退化過程を示し、それに外縁を五分類（Ⅰ～Ⅴ）して、蓮弁と組み合わせ、て、時期的な変遷をたどっている。

それによると、九州で発見されている初期単弁軒丸瓦の時代位置付けは、大野・基肄二城の築城時期を天

人系氏姓の名をとどめている関係から、七世紀後半ごろには筑前地方と異なった、独自の渡来人系氏族の仏教寺院が建立されたものと考えられる。

## 2 新羅系瓦

新羅系瓦は百済系瓦と出土を同じくする寺院がある。

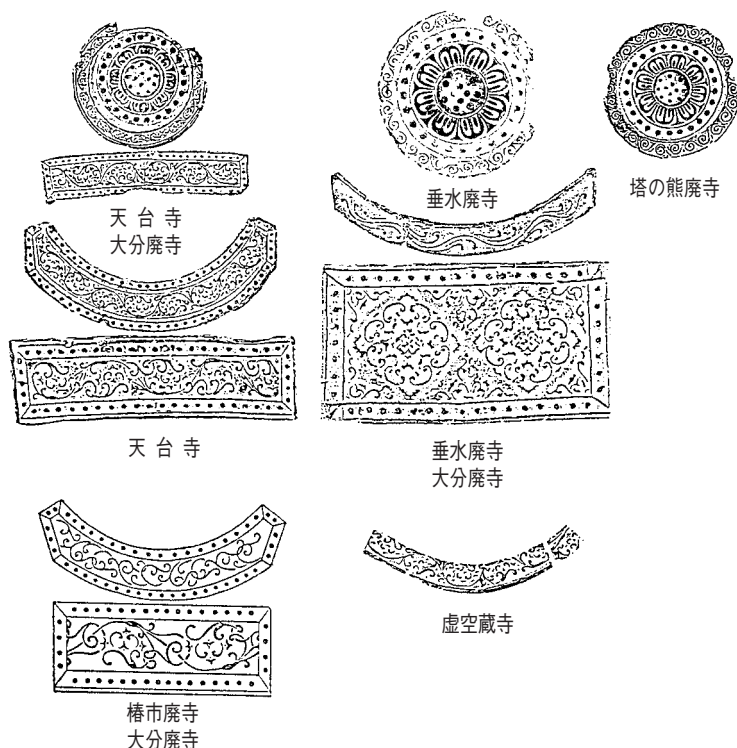


図3—13 豊前地方出土の新羅系軒先瓦

- ・宇佐地域：虚空蔵寺
- ・山国川城：垂水廃寺
- ・京都地域：椿市廃寺

この三寺院は豊前地方の中でも後世まで強い特色を持ち続け、各郡の代表寺院として位置付けることが可能である。新羅系瓦の軒平瓦を検討すると、前三寺院とともに田河郡の天台寺が浮かびあがる。流麗な文様を施した天台寺軒丸瓦は、宇佐地域の虚空蔵寺とともに新羅系瓦の上限と考えられ、また、同じく真野和夫も天台寺及び虚空蔵寺の瓦等を検討し、天台寺が新羅系瓦の走りであるとしている。そして、小田はこれらの寺院相互関係を次のように説いている。

帰化人系氏族構造にふれ、豊前戸籍断簡に見える秦氏を強く評価し、同様に豊前国風土記逸文にある豊前国香春神（新羅神）と採銅との関係を、秦氏の一連事業として理解し、豊前国の新羅系瓦の出現を帰化人系集団の存在と、それに関わる新羅仏教との関係を指摘している。

各研究者が言っているように、天台寺軒丸瓦と観世音寺鐘、京都妙心寺鐘の撞座・上帯・下帯の唐草文の比較と妙心寺鐘裏面に残る銘文は七世紀後半を示しており、豊前地方を生活の拠点とし、新羅仏教を宗教思想とした、半島色の濃い文化が拡充していったものと解される。その最も中心となったのが、前節で記したように天台寺であったのであろう。

### 3 高句麗系瓦

高句麗系の瓦は、天台寺と椿市廃寺から発見されている。両者は同范関係にあり、至近距離という関係も含めて工人及び範の移動など密接な関係が指摘される。

このように、古代の豊前地方には朝鮮三国時代の文化が導入されたことが古代瓦から証明される。

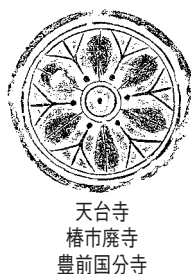


図3-14 豊前地方出土の高句麗系軒丸瓦

## ② 畿内系瓦について

### 1 法隆寺系瓦

法隆寺系軒平瓦は、小田富士雄により集成されている。ここである法隆寺系軒平瓦は「忍冬唐草文」を施したもので、中心に花文の心飾を置き、左右に蔓草を二・三節配し、節目には子葉をもつ均整唐草文をいう。ここでは小田の所論に従うこととする。

出土系瓦は六寺院あり、宇佐神宮を加入すると七遺跡となる。小田は一〇類に分類し、九州独自性をもつ四式出現時期を、天平十年以降から天平勝宝八年までの間に比定している。四式は外区に初めて珠文帯を巡らす新方式を造作してお

り、以下簡略化しながらも形態をたどると述べられている。また、一式が九州に出現するまでを、法隆寺及び法輪寺の出土例を挙げ、石田茂作と浅野清の法隆寺再建論争を検討することにより、九州出現前の軒平瓦は、石田分類の二類に相当していると結んでいる。そして、一―三式を奈良時代前半、四式が奈良時代後半とし、以下十式まで順次変遷をたどるとされている。

豊前地方における法隆寺系瓦は軒平瓦のみで、軒丸瓦は発見されていない。一式は宇佐地方の虚空蔵寺・法隆寺・小倉池廃寺の三者に限ってみられ、相互関係が見受けられる。虚空蔵寺は宇佐郡葛原郷にあり、法鏡寺は辛島郷にある。両寺共に宇佐氏との関係があり、大神比義を檀越とした寺院建立が進められたものと考えられる。更に、大宝三年（七〇三）の褒章で、僧法蓮は、豊前の荒野四〇町を与えられており、宇佐地方を担う人物として注目され、虚空蔵寺建立に十分関与していた可能性が導き出される。虚空蔵寺・法鏡寺共に法隆寺式伽藍配置をとり、虚空蔵寺塔跡基壇上からは、奈良県高市郡南法華寺境内出土と同範の「傳仏」片、約六〇点が検出されていることは注目に値する。ちなみに大和南法華寺は、大宝三年建立と伝えられ、出土傳仏もそのころと推察でき、虚空蔵寺跡の建立時期の根拠となっている。このことから宇佐地方は大神氏・宇佐氏による宗教活動が想定され、畿内との密接な交渉があったことがわかってい

京都郡の菩提廃寺及び豊前国分寺への軒平瓦の流入は、工人の移動によるものと想定され、奈良時代末から平安時代にかけての瓦造作と考えられる。

## 2 川原寺系瓦

九州における川原寺系軒丸瓦を出土する遺跡は、豊前地方では宇佐地域の虚空蔵寺跡と法鏡寺のみで、筑前では観世音寺に一例見られるのみである。観世音寺例は大宰府史跡第七〇次調査（観世音寺推定小子房跡）から検出したもので、奈良川原寺跡出土軒丸瓦の六〇一―C型式と同範であることが確認されている。

宇佐の両寺出土の軒丸瓦は二種類あり、ⅠからⅡ式への展開が明らかにされている。Ⅰ式は虚空蔵寺から発見されているが、法鏡寺はⅡ式のみで、同系・同範瓦が虚空蔵寺から法鏡寺に移行したのと考えられる。両寺出土瓦の背景については文献資料が希少であり、古瓦の導入や創立の事情を知る手掛かりが少ないが、両寺の密接な関係を推察すると、法隆寺の項で記したように奈良南法華寺等の関係を窺うことができるのである。

## 3 平城宮系瓦

京都郡地域を中心とする寺院跡・国府跡等から発見されている軒丸瓦である。この軒丸瓦については若干の意見課題等が残されている。

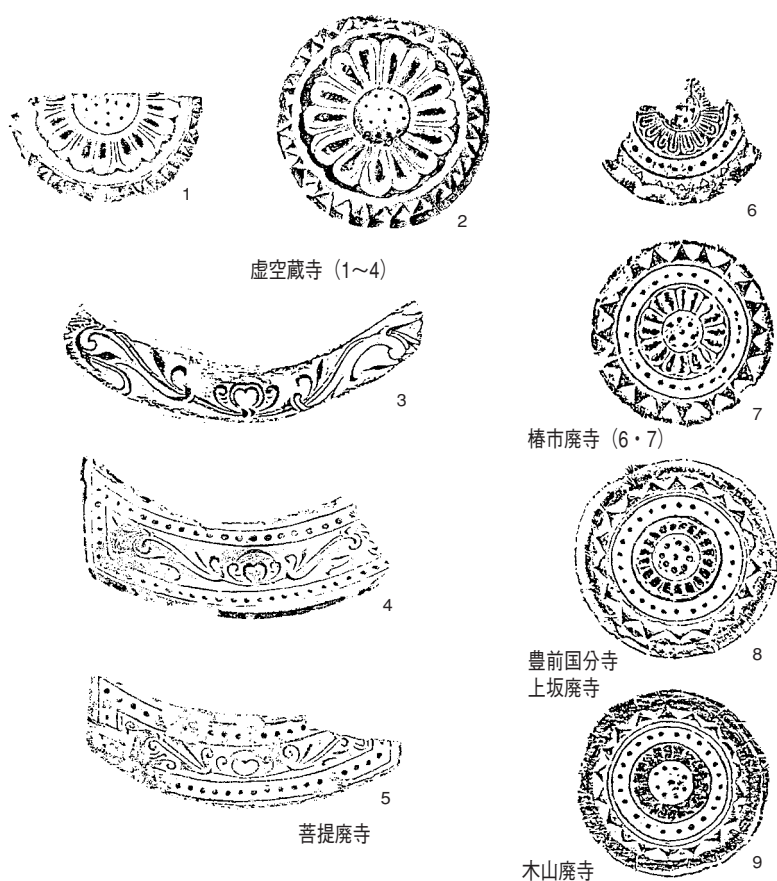


図3—15 豊前地方出土の畿内系軒先瓦  
川原寺式（1・2）、法隆寺式（3～5）、平城宮系（6～9）

椿市廃寺跡から出土した複弁八弁蓮華文軒丸瓦（図3—15・6）は、平城宮跡出土の六二八四—F式と同範関係が成立している。瓦は瓦当径一六・五<sup>（イ）</sup>センチで、中房蓮子一十六個、外区珠文二四個で外縁は高い線鋸歯文である。この瓦範を彫りなおした

ものが同廃寺から出土している。子葉と弁周の一体化、間弁が連結して複弁化、線鋸歯文から凸鋸歯文への変化など、前者と後者は合致することが明らかになっている。更に、上坂廃寺跡・木山廃寺跡・豊前国分寺跡等から発見されている同系統の

木山廃寺

軒丸瓦（Ⅱ類・Ⅲ類）は、椿市廃寺出土のⅠb類

からの模倣ではないかと思われるのである。性格や背景等についてはこれからの課題であるが、平城京出土軒丸瓦の年代が和銅元年から養老五年ごろに推定されており、椿市廃寺Ⅰaは八世紀前半代、Ⅰbもそれに近い年代が考えられ、Ⅱ・Ⅲ類は八世紀第Ⅱ四半期ごろに推定されよう。

### ③ 大宰府系瓦について

いわゆる大宰府系瓦と称しているものに老司式・鴻臚館式瓦がある。ここでは、両式祖形の文様形態の流れを有する瓦を、老司系瓦、鴻臚館系瓦として述べることにする。

#### 1 老司系瓦

豊前地域から出土している老司系瓦は二系統見られる。

一つは垂水廃寺跡及び大分廃寺跡から出土している軒平瓦である。まず瓦当面を観察すると、大宰府史跡から出土している軒平瓦五六〇—Ba

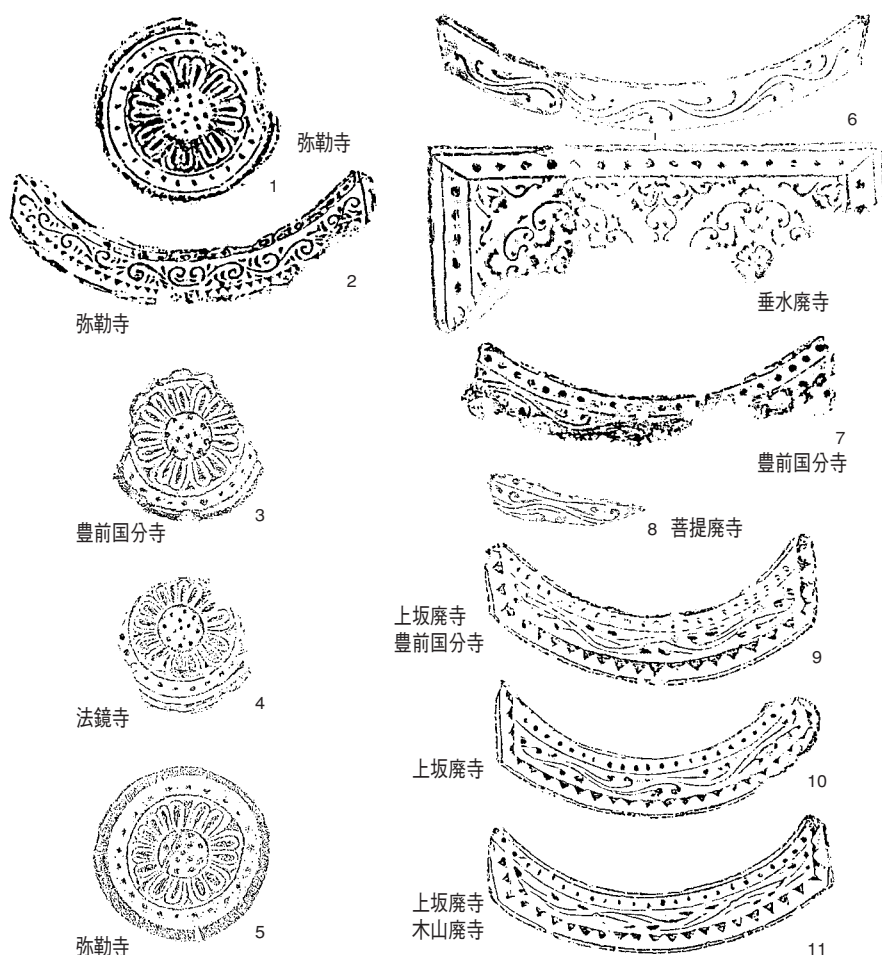


図3—16 豊前地方出土の大宰府系軒先瓦

鴻臚館系瓦 (1～5)

老司系瓦 (6～11)

(老司Ⅱ式)の唐草文と類似していることである。老司Ⅱ式拓影を裏返しにして、垂水廃寺の軒平瓦拓影と重ね合わせると、蔓草の造作こそ異なるが唐草の流れは極めて類似する。更に、垂水廃寺例は顎部に宝相華文を有し、各系統古瓦一覽でも記したように(▲印)、老司式と新羅系瓦を融合させた瓦である。宝相華文は、豊前地域に見られる一連の新羅系瓦からくる文様系譜と考えられるが、大宰府政庁跡出土の方形磚と三角磚を組み合わせてみると、垂水廃寺例の顎部の宝相華文と文様の構成が良く似ていることが分かる。老司Ⅱ式と垂水廃寺例を直結することは難しいが、大分廃寺跡からも発見されていることから、大宰府跡と垂水廃寺跡との間に新羅渡来人を介在として、文化・経済的な繋がりがあったものと判断される。ちなみに垂水廃寺例の年代を八世紀第Ⅰ四半期に置きたい。

二つ目は前項で記したように、京都郡の菩提廃寺跡・上坂廃寺跡・木山廃寺跡・豊前国分寺跡等から発見されている、いわゆ



る老司式の系統と捉えられる軒平瓦である。これらの軒平瓦について、豊前国分寺塔跡西側から発見された、扁行唐草文軒平瓦（老司式）からの展開があった可能性があると考えられており、天平十三年の国分寺造営事業の一環として、老司式瓦の導入があったのではないかと思われるのである。そして、前述遺跡から出土している扁行唐草文軒平瓦（Ⅰ式・Ⅲ式）の展開があると推察されるのである。

## 2 鴻臚館系瓦

平城宮の瓦がそうであるように、大宰府跡出土の鴻臚館式軒瓦も九州一円に広く分布している。

豊前地域に見られる鴻臚館式軒丸瓦及びその系統を組む瓦は、弥勒寺をはじめとして法鏡寺・小倉池廃寺・豊前国分寺・船迫堂・瓦窯から発見されている。鴻臚館標識軒丸瓦とする大宰府分類二二三a（高橋分類I4a）に最も類似するものに、弥勒寺金堂所用瓦がある。弥勒寺は文献より天平十年（七三八）前後に建立年代を求めることが可能であり、八世紀前半代の当地方の鴻臚館式瓦の出土は、この弥勒寺のみで他に例はない。

その他の鴻臚館式瓦を組む軒丸瓦の展開は、八世紀中葉以降と考えられ、亀田修一により三種類に分類されている。また、吉田寛は豊前国分寺採集瓦に着目し、『范ズレ』から生じる瓦当文様を指摘し、豊前地方は同一モチーフの瓦当文様を採用し

ながらも、瓦範のタイプが小地域（郡）で異なった状況にある」と解されている。弥勒寺出土の軒瓦を見ても分かるように、大宰府系古瓦が多量に出土しており、国分寺建立以前に、大宰府と宇佐弥勒寺が密接な関係にあったことが瓦から知ることがができる。弥勒寺出現から天平十三年（七四一）の国分寺造営時期以降に亀田分類のⅠ・Ⅲ類が展開し、瓦工人による造瓦事業が考えられ、屋瓦の補修や寺院の改築に大きく関与したものと想定される。

以上、朝鮮系瓦・畿内系瓦・大宰府系瓦について記したように、豊前地方の寺院及び官衙には多彩な古瓦の変遷を見ることができる。時代的変遷をたどれば、当初朝鮮三国の渡来系氏族集団による寺院造営があり、時期を重ねるように宇佐地方を中心に、畿内色豊かな法隆寺・川原寺等の仏教文化の導入が看取できる。言い換えれば、氏寺的仏教現象から律令国家機構によって、国家仏教として展開されることになり、八世紀以降の豊前地方は、大宰府の影響や国分寺造営に絡み、老司式・鴻臚館式瓦が京都郡地域、宇佐地域において発見できるようになる。

## 五 豊前国分寺の建立

### 鎮護国家への道

聖武天皇はどのような人であったのであるのか。文武天皇を父、藤原宮子を母に持